

平成28年2月27日(土)

老球の細道215

ヒツジで終わる習慣、ライオンに変わる決断

会津バスケットボール協会 室井 富仁

アメリカ・デューク大学バスケットボール部ヘッドコーチで米国ナショナルチームのヘッドコーチも務めたマイク・シャセスキー(通称コーチ・K)の書いた本の中にコーチの強いリーダーシップがどれだけチーム力を高めるかについて例え話が載っている。

「1匹のヒツジに率いられた100頭のライオン軍と1頭のライオンに率いられた100匹のヒツジ軍を戦わせたならどちらが勝つか。言わずと知れた後者が勝つ」

ヒツジに例えられる人間とは、何かあるたびに群がって、結局何も成し遂げられない人のことをいう。ライオンに例えられる人間とは、いたずらに群れず、孤高に物事を成し遂げようとする人のことをいう。(ヒツジさん勝手に決めつけてすみません)

『ヒツジで終わる習慣、ライオンに変わる決断』(千田琢哉著 実務教育出版)という本がある。毎日孫娘に読ませている動物絵本のヒツジとライオンとは異なる。いつも選手的能力をさっぱり引き出せなかった私にとって、日々の自分のコーチングのあり方について自省させるのに絶好の啓発本であった。「お前は今ヒツジか?ライオンか?」。気になる部分を紹介する。

【人生には二通りのコースしかない。「ヒツジのコース」と「ライオンのコース」。

ヒツジのコースを歩んでいる人は、いつも群がってメエメエ騒いでいる。辛いことがあったら、すぐに他のヒツジたちに集合をかけて傷を舐めあってばかりいる。世の中の圧倒的多数の人はヒツジのコースを選ぶ。努力は不要だし楽だから。

ライオンのコースを歩んでいる人は、いつも孤高を保っている。ミスを犯したら原因はまず自分に求め、他人のせいにするのを最大の恥とする。世の中でライオンのコースを歩んでいる人はごく少数。常にプレッシャーを抱えて努力して生きることを常としなければならぬ。間違っても気楽にオススメできないし、選択もできない。

ヒツジは辛いとすぐ群れる。ライオンは辛いと読書する。過去の偉人達等の考え方に触れることによって、いかに自分がちっぽけなことで悩んでいるかを思い知らされる。

ヒツジは甘い人が好き。ライオンは強い人が好き。

ヒツジは2番目から100番目を行き来するのが好き。ライオンは見向きもせず1番。

ヒツジは本物に出会っても「ふーん」で終わる。ライオンは本物に出会ったら即敬意を示す。生まれてから今日までの好奇心と挑戦で得た蓄積が、その人の直感力となって響く。

ヒツジは夢を語り続けて人生を終わる。ライオンは夢を紙に書いて一歩踏み出す。

ヒツジは他人と競争して最後にドロップアウトする。ライオンは自分と競争して最後に勝者になる。ライオンのライバルは常に自分自身だ。自分自身の過去に負けていないか、昨日の自分に負けていないか。こだわるポイントは常にそこだけなのだ。

ヒツジはもらうために必死に生きる。ライオンは与えるために必死に生きる。

ヒツジは見える部分だけに力を入れる。ライオンは見えない部分にも力を入れる。

決断しなければ、全員が例外なくヒツジのコースを歩む。決断した人だけが、ライオンのコースを歩むことができる。大変そうながく少数のライオンたちであるが、本音はいつもこうだった。「ここだけの話、競争率が低いぶん、ライオンのコースのほうが楽だった」】